

荷瘤<sup>ネロ</sup>

肩瘤也、駕舁傭人常荷擔物、拐中處結瘤、俗謂之荷瘤、甚不害、

〔宇治拾遺物語一〕これもいまはむかし、右のかほに、大なるこぶあるおきなありけり、大くら山へ行ぬ、雨風はしたなくて、歸にをよばで、山の中に心にもあらずとまりぬ、又木こりもなかりけり、おそろしさすべきかたなし、木のうつぼの有けるにはひ入て、目もあはずかゝまりてゐたるほどに、はるかより人の聲おほくして、とゞめきくるをとす、いかにも山の中にたゞひとりゐたるに、人のけはひのしければ、すこしいき出る心ちしてみいだしければ、大かたやうくさまなる物ども、あかき色には青き物をき、くろき色にはあかきものをき、たうさきにかき、大かた目一あるものあり、口なさ物など、大かたいかにもいふべきにあらぬ物ども、百人ばかり、びしめきあつまりて、火を、てんのめのごとくにもして、我ゐたるうつぼ木のまへに、るまはりぬ、大かたいとゞ物おぼえず、むねとあるとみゆる鬼、よこ座にゐたり、うらうへに二ならびに居なみたる鬼、かすを去らず、そのすがたおのく、いひつくしがたし、酒まいらせあそぶありさま、この世の人のする定なり、たびくかはらけはじまりて、むねとの鬼、ことの外に忍ひたるさまなり、すゑよりわかき鬼一人立て、折敷をかざして、なにといふにかくとぞせることをいひて、よこ座の鬼のまへにねりいで、くどくめり、横座の鬼、盃を左の手にもちて、忍みこだれたるさま、たゞこの世の人のごとし、舞て入ぬ、次第に下よりまふ、あしくよくまふもあり、あさましとみるほどに、このよこ座にゐたる鬼のいふやう、こよひの御あそびこそ、いつにもすぐれたれ、たゞしさもめづらしからん、かなでをみばやなどいふに、この翁もの、つきたりけるにや、また神佛の思はせ給けるにや、あはれはしりいで、まはゞやとおもふを、一どはおもひかへしつ、それになにとなく鬼どもがうちあげたる拍子のよげにきこえければ、さもあれ、たゞはしりいで、まひてん、死なばさてありなんと思とりて、木のうつぼより、忍ばしは、はなにたれかけたる翁の、こしに、よきと